

岩手県水産技術センターニュース
シーガルボイス
SEAGULL - VOICE

No.13 1999年3月



吉浜漁業協同組合のアワビ選別作業（円内、当センターでの殻長測定作業）

近年アワビが豊漁です。9年度は461トンで実に17年ぶりに長崎県を抜いて日本一になり、さらに10年度は533トンと15年ぶりに500トン台を記録しました。引き続き日本一の生産となる見込みです。しかし、一方では価格が低落し平均単価は1キロ当たり6千円台となりました。

目次

- [特集1](#) [アワビ好漁続く](#)
アワビ王国復活か！、復活の予測、豊漁の要因
水温との密接な関係、アワビの資源管理、系統団体への期待
- [特集2](#) [企画指導部の役割](#)
漁業経営研究、広報活動、総合調整
- [トピックス](#) [ワカメアイスが水産加工品コンクールで入賞](#)
[マツカワの産卵時期はどこまで早まるか？](#)
[貝毒プランクトン抑制に効果あるか？](#)
- [報告](#) [平成10年度岩手県水産試験研究成果報告会](#)
- [編集後記](#)

特集1 アワビ好漁続く

アワビ王国復活か！

本県はかつて日本一のアワビ漁獲量を誇っていましたが、長い間低迷を続けていました。随分と漁業関係者を悩ませたものです。

ところが、最近アワビの漁獲量が増加に転じ、平成9年にはついに長崎県を抜いて日本一の漁獲量になりました。実に17年ぶりの首位奪回でした。平成10年も533トンという豊漁でした。

〔復活の予想〕

実は、この復活を私たちは予想していました。今から4年前の平成7年11月にマスコミで紹介された私たちの調査報告があります。「海の小判（アワビ）豊漁の兆し」「天然稚貝増加傾向」…と大きく取り上げられましたが、当時は関心や反応はあまりありませんでした。

漁業は「獲ってなんぼ」の世界です。まだまだ、漁師の勘や経験がものをいう世界です。最近になってようやく問い合わせがくるようになりました。「豊漁の原因は何ですか？」と。

豊漁の要因

アワビの漁獲量は、基本的には天然貝の漁獲に左右されます。最近の漁獲量の急激な増加は、この天然貝の増加によるものです。

アワビは生まれてから満1年で3cm前後のサイズになり、その後は比較的減耗も少なく3～4年で9cmの漁獲サイズに達し漁獲されます。この満1年の稚貝が多く発生し、順調に成長し漁獲されたことによるものです。逆に言うと、この稚貝の発生量から3、4年後の好不漁の予測が可能であるということがいえます。前に述べたアワビ復活の予想は我々のこのような調査結果から導かれたものでした。

それでは、このアワビ稚貝の発生させる要因は何でしょうか？

水温と密接な関係

アワビ稚貝の発生量を出現させる要因は、水温説が最も有力です。

これは8月から10月にかけて生まれたアワビ稚貝が、初めて冬を越す年の水温の高低により生き残りが良いか悪いか決まるといったものです。

特に1月から2月の平均水温の高低と関係が深いことが分かっています。

アワビの資源管理

近年、稚貝の発生が順調なことからアワビ資源は着実に増えています。

今後、4～5年は、豊漁が続くものと予想されます。今後とも適切な資源管理＝入札量の設定によりこの高水準の資源を維持していく必要があります。

しかし、今年の漁獲量が対前年比19%増の豊漁であったにもかかわらず、逆に金額は5%下回る結果となりました。「需要がもう頭打ちだ」とか「何のための増産だったか」という声も聞かれます。

今年も水揚げされた1ワビのほとんどが県外の業者を買われ、3割前後は中国向けの乾鮑向けとなったそうです。現在のところ商品としてのアワビは私たちには縁の薄い特殊な商材のようです。しかし、多少価格が安くとも水揚げ金額全体を増やすには、アワビを私たちが身近に買えるようなものにしていく必要があるかも知れませ

ん。

系統団体への期待

本県のおわび漁業者は大半が家族的な経営体です。このようななか生産物の一元集荷と販売、生産者サイドの価格維持、さらには安全速やかな代金決済と大きな役割を果たしてきたのは系統＝県漁連です。日本一の資源量＝生産量を抱え、乾鮑で明らかのように世界一の品質を誇る岩手の産地の有利さを活かし、また一方できめ細かな販売の展開に期待するものです。思いつきですが、例えば、高価格の大型乾鮑向け特別規格の設定、入札や生産時期の拡大などを検討されてはどうでしょうか…。

〔増養殖部〕

[\[目次に戻る\]](#)

特集2 企画指導部の役割

当部は、漁業者が意欲と希望の持てる収益性の高い経営ができるように支援する「漁業経営研究」、広く一般の皆様に当所業務を紹介する「広報活動」、それから県民ニーズに応えるための所内研究課題の「総合調整」という役割を担っているところです。

漁業経営研究

まず、“漁業経営研究”についてですが、県民に開かれた総合的な試験研究機関として平成6年に開所した時の目玉の一つとして、水産業の経営安定対策の一環で、経営上の諸問題に関する試験研究を掲げ、「新規養殖業の経済性の検討」、「沿岸漁業経営の適正化の検討」、「流通、消費の動向と価格形成機構の解明」などの取り組みを行っているもので他県にもあまり例がない研究内容と言えます。その具体的な取り組み内容については日を改めて紹介します。これからは個々の漁業者の皆様方にも経営・経済面においてきちんとした分析のもとに、高い収益をあげる漁業が構築できるようになっていただきたいとの主旨からも意義のある研究と思っています。

広報活動

次に私たちの業務として「広報活動」があります。具体的には、当所独自の刊行物である「シーガルボイス」、「岩手県水産技術センター試験研究概要集」の刊行、毎年7月20日の「海の日」にちなんで行う「公開デー」の開催、学校関係者の見学や一般視察者などの対応、それから最近盛んなイベントへの参加など、いずれも今の時代では極めて大事な仕事ですが、中でもイベント等の企画開催あるいは参加などの取り組みが喫緊の課題です。今の高度化した物流（流通）という怪物、その中に各方面からの情報が乱れ飛び、そのうえ競合産物の外国からの大量流入、このモノのあふれる今の販売競争に打ち勝つには、市場に出すにも何か一歩進んだ工夫が必要だと思えます。せっかくの地元の良いモノもその「よさ」を発揮できずに埋もれてしまっているような気がします。ひょっとしたら、本県のもは実際面でもっと価値があるのでは。その面における原点の対策としてまずは各方面にもPRイベントの開催あるいは参加への積極的な取り組みをお願いするところです。

特に昨年を振り返って特徴的なことは何かといえば、一昨年に本県で行われた第17回全国豊かな海づくり大会の開催を契機に、最近各地に結成されはじめた「海づくり少年団」の当所見学があったことです。これは小学生を中

心としたそれは賑やかな団体で、なにしろ大人でないものですからどんな質問がでるか想定できず職員も四苦八苦というところでした。でもそのなかから将来漁業界を背負って立つ者が出るかもしれないと思うと苦勞も忘れ何か楽しくなるお客様でした。来年もまた来てください。



釜石特産おさかなフェア' 98

(釜石・大槌地域秋さけ普及協議会、釜石東部漁協主催)

〈H10. 12. 26～27、盛岡市中三デパート正面入口にて〉



蛸の浦小学校「海づくり少年団」の学習会風景

〈H10. 11. 11、当センター大会議室にて〉

総合調整

最後に各部との「総合調整」ですが、県民ニーズの多様化により取り組み課題が年々増えています。祖のほか、社会の成熟・時代の変化に伴い衛生面の対応も多くなり、いろんな研究課題が出てきています。当所には、研究業務を所管する部署は我々の所属する企画指導部の他、漁業資源部、利用加工部、増養殖部、種苗開発部、漁場保全部の6部がありますが、その全体の窓口や出された課題をどこが対応したらよいか調整したりします。要はまとめ役の仕事です。いずれにしてもみんなで協力、助け合いながら進まないとい何も解決しない世の中です。

これからもみんなでガンバッテいきたいと思ひます。

〔企画指導部〕

[\[目次に戻る\]](#)

トピックス

ワカメアイスが水産加工品コンクールで入賞



利用加工部が陸前高田市農協と協同開発したワカメ粉末を用いたワカメアイス（わかめっこ）が、昨年8月に行われた平成10年度岩手県水産加工品コンクールにおいて堂々の県漁連会長賞を受賞しました。ワカメを用いたデザート類は珍しく、塩っ辛い加工品ばかりを試食していた審査員の高い評価を得たようです。マスコミにも大きく取り上げられました。この

アイスは陸前高田市内で200円で発売中です。きれいな緑色と何ともいえないワカメの風味が自慢です。どうぞご賞味下さい。今後とも利用加工部では、県産水産物を用いた製品の共同開発に積極的に取り組んでいきます。また、より新鮮なワカメを全国の家庭に提供できるような新しいワカメ製品についても研究していきます。漁業者、加工業者、消費者の皆様のお役に立てる研究に朝鮮していきますので、よろしくお願ひします。

〔利用加工部〕**マツカワの産卵はどこまで早まるか？**

成熟を促進するホルモンを投与すると産卵時期が早まるのが数種の魚類で報告されており、種苗開発部では、マツカワを対象に平成7年からこの研究に取り組んできました。マツカワの産卵期は通常3月から4月ですが、平成7年は11月と12月の2回親魚にホルモンを投与したところ、翌年1月に産卵させることに成功しました。しかし、この卵の受精能力は必ずしも高いものではありませんでした。そこで、ホルモン濃度や親魚の年齢、飼育水温などを変えた結果、平成10年には、11月に1回ホルモンを投与しただけで、同年12月に産卵させることができました（実は正月明けに産卵させる予定でしたが…）。さっそくこの卵を使って人工授精を行い、見事12月26日に最初のふ化仔魚を得ることができました。言うまでもなく、担当者は「よい年？」を迎えることができ、平成11年度が飛躍の年であると信じて疑わないところです。お蔭様で、ふ化仔魚はスクスク成長し、現在ではカレイらしい体つきになっています。ではなぜ産卵時期を早める必要があるのか。それはマツカワ養殖にとって非常に有益な技術になりうるからです。これまでの養殖試験結果から、大型マツカワの効率的な生産はふ化日が決め手で、早い方が有利であることがわかっています。このため、12月にふ化したマツカワが今後どのような成長を示すか興味深いものがあります。ただし、ふ化仔魚は飼育水温は低すぎると生残率が低くなりますので、真冬にふ化すると飼育水温を上げるためのエネルギーコストが高くなります。

以上のことをふまえて、今後は、養殖用種苗のふ化時期はいつがベストかを総合的に検討していく予定です。

〔種苗開発部〕**貝毒プランクトン抑制に効果あるか？**

貝毒には麻痺性と下痢性の2種類がありますが、その原因となるプランクトンは春から夏にかけて（最近秋にも発生するようになってきている）海水中に多く発生します。これらのプランクトンのうち、麻痺性貝毒の原因となるアレキサンドリウム タマレンセの増加・減少は海水中の他のプランクトンの増減と関係がありそうということが分かってきました。そこで、実験室で確かめるため、18種類のプランクトンを漁場から集め、それぞれ別々の培養液で増殖させ、そのろ液に栄養塩類を補強した後タマレンセを加えて培養してみたところ、15種類のろ液では通常の培養と変わらずにタマレンセが増殖しましたが、他の2種では2割程度、また1種では7割程度増殖速度が低下することが分かりました。なぜ、ある種のろ液中で増殖速度が低下するのか、まだ分かりませんが、ろ液中の六低の成分（単一あるいは複数）がタマレンセの増殖を抑制しているのではないかと考えています。今後、さらに実験を続けていきますが、うまくいけば、タマレンセの増殖を抑制する成分が見つけれられるかも知れません。それが見つかれば、人工的に安くでき、かつ海水中の他のプランクトンへの影響もないことが分かれば、タマレンセの発生・増殖を封じ込める方法の開発につながるのではないかと考えています。

〔漁場保全部〕

[\[目次に戻る\]](#)

[こちらをクリック](#)

編集後記

前12号で実りの秋を向かえ明るい話題を期待し、秋漁を向かえたところでしたが、期待した秋サケ漁も不振に終わりました。

つくり育てる漁業の優等生であったはずのサケ増殖も近年その来遊量が減少傾向にあり、今後を心配せずにはいられません。

これまでを振り返り、初心忘れず熱意とさらなる技術の研鑽を重ね、安定した資源の構築を図らねばと強く思う一人です。

このためにも、当センターの役割は大変重要であることを肝に銘じ、「さけよ、来たれ」の気持ちを常に持ち、これからの試験研究に取り組んで参りたいと思っております。〔副所長 菅原紀綱〕

[\[目次に戻る\]](#)